

全国的な学力調査の CBT 化検討ワーキンググループ

論点整理に向けた委員ご意見

宇佐美 慧委員

<CBT で測定できる能力範囲についての実証的検討（妥当性検証）>

インタラクティブなやりとりを通して、speaking の能力やコミュニケーション能力が測定できるというのは CBT のメリットである。一方、例えば（JIEM の資料<第 4 回会議資料 3>中に出てくる）「思考力」や「課題解決能力」といった能力が CBT だからこそ測定できる（または PBT では測定しにくい）という点は、本当にそうなのかという点は、慎重に考えた方が良い。つまり、CBT だからこそ測定可能な能力が何なのかについては、単なる研究関心を超えて、現場の教育者へのメッセージ性という意味で重要であり、今後もう少し定性的・定量的な方法で具体的に詰めた方が良い。

定性的な所ではログ分析がある。定量的な観点からとしては、CBT が PBT と比べて実際に、スコアに現れている量的な構造（因子構造）に違いがあるのか、または受験者のその後の何らかのパフォーマンステスト等の結果（外的基準）との相関分析を行うことが挙げられる。このような妥当性検証がこれまで、私の理解では、あまりなされていないと認識している。こういった、CBT だからこそ測定できる能力というのが、単に「期待されるレベル」を超えて、実際にスコアの中の定量的な証拠として見ることもできるのかどうか、予備調査や実地調査の中で積極的に調べていく事が今後必要ではないか。